

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	子どもたちの日常生活の中のイメージの停滞をみる : 「スナップ」を材料として
Author(s)	中川, 節子
Citation	児童の言語生態研究 , 14 : 38 - 43
Issue Date	1990-11-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045156
Right	
Relation	



特集

あの子は
この子

子どもの個性への接近

子どもたちの日常生活の中の イメージの停滞をみる

「スナップ」を材料として

中川節子

私たちには、「こまる」の作文を材料として、子どもたちのイメージの停滞を考えてきた。しかしそれだけでは、子どもたちの本心をどこかにとり落すような気持ちになった。それは、私がスナップを拾っている時、出会う子どもたちが、大半は、イメージが停滞し、こまった状態にいる子どもたちなのである。イメージが停滞したとき、子どもたちは、その子なりの限界に立たせられるのである。その限界そのものに、スナップのシャッターチャンスがあるといっても過言ではない。むしろ私は、いつも、そういう子どもたちをねらって、スナップをとろうと構えているのである。ところが、こうしてとったスナップを子どもに返すと、とても嫌がられ、拒否反応をおこす。自分が困って立ち往生をしているのだから、いやがるのは無理もないことである。特に、高学年は、拒否の仕方が

強い。作文は、自分の生の感情をむき出しにはしてはいない。この項では、そうした子どもたちの日常生活の中のイメージの停滞を追うことにより、子どもたちのイメージの在り方の個性というものに近ずきたいと考えている。以下、イメージが停滞している状態の子どもたちのスナップを、年齢ごと事例をあげて、その特徴をみていきたいと思う。(また、イメージの停滞状況をみるために、その反対のイメージの停滞からの脱出のスナップのある学年は、あらせて、それも、のせてみた。)

●就学以前(三歳〜六歳)

例1

ふかしとかよの誕生日。パンダのショートケーキが出る。大よろこびではしゃいでいる。

さて、おもむろにケーキを食べ

例2

停滞からの脱出

炊飯器のふたがちゃんとしまっ
ていないのを、食事間ぎわに気が
ついた。

へまた——、あいこでしよ
! だめだっけいっただでし
よ、さわつちや。>

あいこ「さわつていないよ。あい
こじゃないよ。」

例3

停滞からの脱出

アイスクリームを食べ終るころ、
中の芯が出てくる。

ふかし「あ、おはしでできた。」
と、ペロペロ、舌を出してその
芯をなめる。思わず妹のちよが、
ちよ「きつたない!」

ふかし「きつたないっけいっただ
な!

ちよ「きたくないなんて、いわな
いよ。ちよ、いわないよ。」

から。ところがふかしはまわりを
みんな食べると、じつとして、パ
ンダをみているだけ。そのうち、
ポロポロ涙を流す。びっくりして、
どうしたのかとたずねると、

ふかし「ぼく、たべられない。パ
ンダがかわいそうだよ。」

と、蚊のなくような声。食べた
い気持ちとかわいそうに思う心が
葛藤をしている。

へふかし三歳男/かよ五歳女

へあいこよ!>

へおい! おまえじゃない
のか。>

へあいこよ!>
あいこ「あいこ? さわつたはず
ないよ。」

へあいこよ!>
あいこ「いいよ、あいこで……。」
へ三歳女

ふかし「いったね。こつちにきたとき、こう、ちいさいこえで、きつたない！」って、いったよ。」
ちよ「いわない。だって、ちっちやいこえじゃ、ちよにはきこえないもん。」
へちよ四歳女、ふかし六歳男

●泣いちゃう・二年生
就学以前については、例だけにどめておくが、イメーシの停滞例と、停滞からの脱出例が拾えた。どの学年でも、この類のスナップをみつけると、泣くことが多いが、就学前の子では、小学生よりも、イメーシの脱出の仕方にとんちやくがないように思えた。自分の言動をイメーシのままに動かすからだろうと考える。

例4

入学式の日。
かずお「ぼくね、おねえちゃん、このがっこうにいるんだよ。」
へちよ「おねえちゃん、おねえちゃん、おにいさん、きている人はいないかな。」
ひでいち「ぼく、おにいちゃんいるけど、このがっこうには、きていないんだよ。」
へちよ「あら、そう。」
ひでいち「たまがわがくえんなんだ。」

例5

へへえ、それで、君は町三小ね。」
ひでいち「うん。」
と、下を向いたはずみに、眼鏡が落ちたが、しばらくの間、拾えずにいた。
へ二年男

もり「ぼく、インベーター、まんえんぶんやったよ。」
ちの「いけないんだ。いけないんだ。インベーターなんか、やつちやって。」
もり「ぼくんちに、インベーターゲームがあるんだもの。」
ちの「うそだ、うそだ。」
もり「あるもん。」
ちの「じゃあ、きょう、ぼくんちにもってこいよ。」
もり「あそぶやくそく、しちやつたもん。」
ちの「じゃあ、ぼくも、もりんち(家)へいくよ。」
もり「だめだよ。きむらとあそぶやくそくしちやつたから。」
きむら(ぼつりと)「ぼく、やくそくしてないよ。」
もり「……」
ちの「……」
へ二年男

例6

○悲鳴
ノートを破って使っているので、私が怒って注意すると、下を

向いている。
へなんでやぶるの？ だめよ。」
「……………」
となりのM子「この間もやぶっていたんだよ。先生がいつて言たって。」
へ先生そんなこと言わないよ。」
「……………」
はっと思出した。二・三日前、大滝君が、ノートがなくなっちゃったから、あとすこしで、一年生もおわるから、前使っていたノートが、あまつているので、使っていないか聞きに来たのだ。そのときは、いいと言ったが、やぶって使うとは思ってもみなかった。前の使っていないノートを破り、今のノートのうしろにはっているのだ。

例7

へアーそうか。先生、いいっていったね。前のノート使っているって。思い出した。ごめんね。」
と言うと、今まで黙っていた大滝君が、
「ヒュー。」
と実になしそくに泣き出した。
へ二年男子(S・62・3月)

へ何やってんの。こまるじゃない。ちゃんとさがしなさいよ」
夢中で、さがすが、どうしてもない。
駅に着いて、母親が、お金を支払うと、
「なあーんだ。お金で解決できることなのか。」

例8 二年生例

すがい「おれんこのおかあさん、おとうさんよりつよいんだぜ。」
みやもと「おれんこのおかあさんだつて、けんかするとかっちやうんだぜ。」
わたなべ「おれんこのおかあさんなんて、おとうさんより年が上で、いばつてんだぜ。」
くろき「おれんこのおかあさんだつて、おとうさんより、ずーと、ずーと、年上なんだぜ。」
わたなべ「おまえんとは？」
すがい「おれんこの、おかあさん、おとうさんより年下だ。」
へ二年男女

特に例1については、ほとんど泣く寸前であった。就学前の例2・例3のような自由がない。自分のその学年

での精一杯の構えを崩され、ぶつつきと糸が切れたようにイメージが、停まつてしまったといつてよいだろう。

●強がる三年生

例9

宿題を忘れて立たされた、かとう君。

かとう「ほく、宿題わすれたんじやないんだ。やったけど、ノートをわすれちゃったんだよな。」

他の子どもがうるさそうに、「うそばかりついて。」という。

かとう「ぼく、宿題やつたんだよ、先生。ただわすれちゃっただけだから、ぼく宿題やってきたんだ。だから、立つことないと思う。すわつてもいいですか。」

へじや、ノートを出さないとわからないから、ノートとりにいつてくれる？」

かとう「うーん、ぼく、とりにいつてもいいよ。」

外に出ていつたかとう君の後を見守る。かとう君は校庭の隅にいつて、まるでかくれんぼう。適当な時間を見計らつて連れにいく。

へどうしたの？」

かとう「先生、ぼく、家にいつたんだけど、おかあさんがい

なかつたから、家がしまつて入れなかつたんだ。」

へ……じや、あした持つて

きてね。」

かとう「はい。ね、じや、ぼく宿題やつてきたんだから、立たなくてもいいでしょ。」

△三年男

かとう君の例は、表面は困つていないようにふるまつても、その実、大変困つている。だが、三年生らしいのは、行動することが、イメージの停滞からの脱出だと思つてころだと考える。他の例にも、泣いても、その後、なんとかしようとする。イメージの部分での解決ではなく、現在の状況下における問題解決を急ぐ傾向があるのではないか。例9の場合も、それが伺える。

例10

一分間スピーチの順番、はじめての男子、マイクの前にすわるとコチく

山本「……はあ……はあ……」

C「どうしたんだよ、ハアハア……つて」

山本「ハア、ハア……」(約二分)

T「こんどにする？」

山本「息をのみこんで「うん」

席につくと、かんきわまり、ワ

ーとなき出す

二、三日後

山本君は息もつかず、ただ一点をみつめ、一息で話終つた。

△三年男子

例11

イメージの停滞からの脱出

たかこ「かずお君、のりたべる？」

かずお「うん、たべたい。」

たかこ「かずお君、あたしに、いたずらしたい？」

かずお「うん。」

たかこ「女の子、ぜんいんにいたずらしたい？」

かずお「うん。」

たかこ「女の子、ぜんいんにいたずらしたい？」

かずお「うん。」

たかこ「ずつとだよ、きょう一日。」

かずお「うん。」

たかこ「一年も、二年も。」

たかこ「しばらく頭をかしげて考えていたかずお君、

かずお「ぼく、いたずらしているほうがいい。」

△三年男

例12

停滞からの脱出

二年生と三年生の対抗ドッジボール。三年のまさゆき君が、逃げ場を失い、あたつてしまった。

のぶお「どうして、にげなかつたの？」

まさゆき「てきに、うしろを見せ

てにげられるか。」

へのおお二年男/まさゆき三年男

例10

例11のこまらない例をみても、三年生ぐらいから、現実の社会の部分が、イメージの部分を押しのけていくように伺える。

●こまらない四年生

例13 イメージの停滞からの脱出

「先生、けんかしているよ。」の声に、教室にいつてみる。あさい

君とまつだ君がけんかのまつさい中。あさい君がまつだ君を強く押しした拍子に、まつだ君はつくえに顔をぶつけてしまった。まつだ君の鼻から、鼻血がたらたら……。

押ししたあさい君はびっくりして、あさい「おまえ、鼻血、鼻血！」

ところが、まつだ君は、うでで鼻血をさつとひとふき。たつたひとこと。

まつだ「鼻血がナンでえ！」

まわりにいた男子は、「エーッ」と、声をあげる者。あせんとする者。

それからしばらくの間、わがク

ラスの男子の間では、「鼻血がナンでえ！」が流行語になった。

△四年男

居直ることで、こまらないいい例といえよう。こまつて、イメージが停滞している例は、四年生には、ひとつもなかつた。

●プライドが感情の停滞をうながす五年生

例14 一学期末の男女混合ソフトボール大会。こばやしチームが校庭で練習をはじめた。ところがモジモジ、グズグズしているまみさんが、こばやし君の目についた。

こもり「もっと、真剣にやれよ。」

まみさんはいつまでもグズグズしている。堪忍袋の緒が切れた男

……

……

……

子と、まみさんをかばう女子との間に、いいあらしい。

こぼやし「なんで真剣にやらないのかよ。」

女子「だって、しかたがないでしょ。」

男子がいくら問いつめても、女子はしかたがないでしょの一点張り。

まみ「私、生理なの。」

下を向いてだまっていたまみさんが、泣きながら姿を消してしまつた。

こもり「先生、たいへんなことになつてしまつたよ。まみさんに、いわせてはいけないことをいわせてしまつたんだよ。まみさんに会つて、あやまらなくちゃ。でも、この話は秘密にしてほしいんだ。もし、ほかの人に知れたら、まみさんがきずついてしまう。」

まみ「……」

五年男

例15

授業中、話を聞くときのなのに、ひとりの子がいつまでもノートをとっている。へノートをとっている人はやめなさい。といても、やめない。公然としからないうで、そつとシャープペンを取り上げる。その子の視線は私の手にあるシャープペンに注がれ、全く私の

話など聞いていない。シャープペンを机の上に置き、その上に教科書を重ねると、今度は下を向き顔を上げようとしない。その日は返さず翌日、その子の机の下に落ちておいた。

その日の日記帳に、「どうもありがとう。」と記載してあつた。

五年女

例16

ふたりですごい取っ組み合いのけんか。

やめなさいか！

やつとのことでふたりを引きはなし、へ顔をあげる。とふたりにいった。ひとりはずぐくやしそつと顔をあげたが、もうひとは、全くあげる気配がない。

卑怯者め、顔もあげられないのか。

と、いったとたん、すつと顔をあげると、手に持っていた消しゴムを床にたたきつけた。

五年男

例17

運営委員という、学校全体の委員を決める日のこと。

代表委員や学級委員に決まっている人は、仕事が重なるので大変ですから、それ以外の人を投票で決めましょう。

……

みつあき「なぜ、学級委員はいけないの。ほく、そんなら学級委員なんて、ならなければよかつた。運営委員になりたくないなあ。」

みつあき君は、投票用紙に自分の名前を書き、あきらめが悪い。開票しているときも自分の名前を黒板に書いている。

ゆういち「おい！ 未練だぞ！」

みつあき君は、パツと黒板の名前を消して席にもどつた。それから、運営委員のことは話さない。

五年男

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

翌日。

やなぎ君、ところでしま君となかなかおりましたの？」

やなぎ「ほくは、しまとけんかもしていませんし、なかなかおもしろいと思います。」

よこた「水に流したのかな？」

やなぎ「……」

五年生になると、人間関係がひときわ目立ってくる。他者との関係での一言が、自分のイメージを停めてしまう結果にもなりうる。

●本心をかくしたがる六年生

林間学校へ行くバスの中。なかなか目的地に着かず、いらいらしている子が目にとまる。

その子の弁当は、べつこのバスの友人にあずけてあるらしい。バスの中で昼食になり、みんなが、分けてくれようとする、窓の外をながめ、きたむら「いや、いいんだ、いいんだ。」

と軽く手を振り、かっこよくうけながす。ところが、みんながあまりしつこいので、きたむら「おれだって、本性いって、食いたいの。はらがへっているんだ。」

と、きつとにらんだが、そのあとは、ほとんど顔を上げない。

六年男

……

おさむ君が泣いている。なかなか理由をいわない。泣かしたと思われる子に聞くと、

こやま 「ぼく、ちよつとといったただだよ。」

〈何をいったの？〉

こやま 「オサチンといずみさんの洋服、おそろいだねって。」
その日は赤の黒のしまのシャツをふたりとも着ていた。

へでも、あなたは、その服とつてもよく似合うよ。〉

おさむ君は、にこつと笑って、それから毎日、その服ばかり着てきた。反対に、いずみさんは、決してそのシャツを着てこない。

〈六年男〉

このクラスの運動能力は、女子は抜群だが、男子は普通以下。ある日、全クラスで、Sグラウンドまで、対抗試合に行く。

女子は大勝、男子は大敗。喜ぶ女子たちに見とれて、ふと気がつく、男子がもういない。控え室へいってみると、

『お先に失礼します。先生へ、男子一同。』

と、記してある。

いそいで追いかけて、男子をよびとめた。

やすい 「先生、ほつといてよ！」

〈六年男〉

ふたりの男子が、すごい勢いでけんかをした。けんかが終ると、勝った子はすぐ教室にもどり、席についた。負けた子といったら、いつまでたつても教室にもどらない。

ポツンとつっ立つた子の顔をのぞこうとすると、くるりとむこうを向いて、

えぐち 「しばらく、ひとりにさせてください。」

〈六年男〉

むきになる、つっぱる、捨てゼリフ等は、子どもがイメージ運動に何らかの変化が生じた時のものなのだとわかった気がする。私は、その何らかのイメージ変化が生じるところが、私は、教員として見のがしてはならないものだと思う。一連のイメージの停滞を追いかけていくと、どうしても、ひ

つかるものがある。それは一・二年、三・四年、五・六年と、低・中・高の変化である。低学年→中学年の変化は、イメージ活動が、停滞しないということである。私は、二〇〇あまりのスナップをとつたが、その中に、こまっついているものは、ひとつもない。あまりこまらないのである。しかし高学年の悩みは大きい。スナップでこれだけ拾えるということは、それは永山の一角といえるのではないか。

次の例は、最近の私の子どものスナ

ップである。五歳の男である。

「おかあさん、ぼくね、きょうから、おっぱいさわらないんだ。指しゃぶりもしないんだ。」

〈あら、そう、どうしたの？〉

「ぼく、つよくなることにしたんだ。そんでつよいオトコになるんだ。」

〈五歳男〉

このことをきいて、なるほどと思った。この子は、おっぱいさわりと、指しゃぶりに伴う、イメージをたちきることが、強い男になる道だどこか

で気がついたのかもしれない。以前に、生理感を伴うスナップを集めたことがあった。その時は快感的要素の強いものを集めたのだが、この生理に伴うイメージ活動というのが、子どものイメージ活動の原点にも、なっているように思う。そして、生理故に、快感にもなるが、ひとつ道をまちがえば、強烈な嫌悪感にもつながってくるのではないか。そう考えていくと、中学年→高

学年のイメージの停滞の仕方が変化するのも、うなずける。そうして思い返してみると、つい最近拾った三つのスナップ等が、その過渡期になるかなと思う。困るまではいつてはいないが、「いやあね」と思っているものである。

兄弟学級で、六年生と一年生とが、ときどき、一緒に給食を食べ

る。そのとき、六年生担任の男の先生が、残ったごはんでおにぎりを作り、食べさせるといふ話題になった。

「わたし、日先生がにぎるおにぎり、いやなのよね。」

〈あら、どうして？〉

「だって、いやよね。」

「いやよ。」

と、口々に女の子がいう。

〈先生も作って食べさせようと思つていただけだな。〉

「先生ならいいのよ。」

「そう、女の先生ならいいんだけどね。」

〈六年女子〉

中学年だったら、よるこんで食べるだろうと、考えられることだと思ふ。六年生になると、体でも男・女の区別が、出来てくるので、精神的にも、生理感覚としても、異ってくるのだから。

受け持ちの子（一年生）が、体の具合が悪くなり、保健室に寝ているので、見に行ってみようとして、保健室の前までくると、廊下で六年生の女子が、ギャー／＼さわいでいる。ドアをあけようとしても、あかない。

〈どうしたの？〉

「男子が、中からしめちゃって、いるんです。のぞくっていつて。」

「日とかいって、もう、うるさ

くつて。」

「まあ、入れないの？」

「入ったら、うるさいよ。女の先生だよ。」

「あけなさい。先生ですよ。」

「ワ——キ——。」

中にやつと入ると、男子が、パンツ姿でいやらしいとか、キヤードとか、さわいでいる。私が、入ったとたん、近くにあったもので前をかくしたりしている。

「何も、パンツをぬぎなさい。」

とは、言っていないですよ。」

「ヤダ——。パンツぬげだつて。」

中では、イヤラシーとかエッチとか本当に低学年並のさわぎである。 （六年男子）

この部屋の中は、イメージ活動で、悲鳴をあげながら、楽しんでいるとしか思えなかつた。

例 26

運動会の日、応援団長が、学生服を着て汗をとばしながら、応援をしている。汗ふきタオルをかしあげようとする。

「オレのじゃないから。オレのもうすこしきたないからいい!!」と、拒絶される。

使っていないタオルだと言っても、決して使わなかつた。水道に行き、ブル／＼と顔に水道の水を直接かけると、そのま、顔をブル

ツとひとふりして、行つてしまつた。 （六年男子）

以上、三つのスナップは、測らずも、六年生のものである。「いやあね」のスナップには、思考的要素は勿論入っていない、自分のイメージが、どん／＼自分からそれを排斥するように働いていっているのである。そしてイメージが、停滞しはじめると、こまるという現象に至るのではないか。今の子どもたちは、この生理的なものを伴う感覚的なイメージが、男と女とを考える上で、あまりにも早くきて、バランスを失いかけていのではないかと思う。特に例24の男の子の様子等は、ひと昔前には見られなかつた現象である。女は、かくしたが、男は平気だつたように思う。感情面ばかりが、はしりすぎて、構えのとり方に、やはり幼さが出てきているからがろうと思う。構えといつてわかりにくければ、ものの方の見据え方それ自体に、問題があると、考えられる。この感情は幼い、このイメージの流し方は、低学年並だと、自分のイメージを見据えられずにいるところが、すこしも、成長しない原因だと考える。今風の見方をすると、勉強という名のもので強いられてきたものをイメージ活動で、発散させているともいえるが、勉強そのものも、イメージ活動の一端であると、子どもたちにわかつてもらいたい気がする。マグマとしてのイメージの出方が、単に感情のぎょうぎの悪い発散とはし

てほしくないのである。自分の行動をすべてイメージ行動として位置づけ、それを見据える構えさえ、しつかり、培えば、もつともつと、すばらしいイメージ活動を子どもたちは展開できるし、停滞は、停滞として、受け取られるものを、と考えてやまない。また、こんなに感情が、悪者、知性は善人となつている時代にも、感情がこれだけ子どもたちの中核をなしているものだということが、わかつていたことなど、胸打たれたということを書きそえておきたい。

最後になつてしまつたが、私が今現場にいて、この問題は徐々に広がりつつあるものだと思う点のひとつあげ、この稿をおさめたいと思う。

六年生のクラスが荒れ、担任の先生が、学校に來れなくなつた。そのかわりに他の先生が臨時に受け持ち、そのとき、そのクラスの女の子が書いた文章があつた。(よみあげてくれたので、要点だけをメモにとつた)

○先生、ごめんなさい。私は、○先生をきらいじゃありませんでした。でも、クラスのみんなが、いろいろ、悪口をいったりするので、ついわたしも、そんな気もちになつてしまつて、そしてそんな気もちになりだすと、だんだん○先生が、そんなふうになつてきて、そしてきらいになつて、ずいぶん○先生にひどいことをしたり、いったりしました。今、考えてみると、そんなに

のに……

（六年女子）

自分のイメージがどん／＼ふくれあがつていく時がある。それは、喜びよりもむしろ、マイナスイメージと考える恐怖心とか、被害者意識である。そういう動きがあるという自覚を持つことができるといふことが、今の子どもたちにとつてとても大切なように思う。他の原稿で困るの作文による実態調査が行なわれているが、六年生のイメージの停滞の一位は、他と自分との関係であるという。他が、個人の場合が良いのだが、他が、みんなと思える意識がこわいと思う。みんなという見えないなるとなく作られたイメージの中に埋没することの恐ろしさを感じる。そしてみんなを助長し、また成育してしまつているのは、私たち、教育の善意的義務感なのではないかと思う。昨今である。民主主義教育の名のもとに、いつのまにか人は平等、それがみんな一緒に、みんな同じに。と没個性化してしまい、イメージの働き方すらみんなを意識している。人そのものを人そのものとして、見つめなおすという自覚が、私を含めて、教師の大事なつとめだと思ふ。

(多摩市立西永山小・教諭)